

ハイディ

(第十九回)

津田芳雄譯

ハイディとお醫者様は、それからまた長いこゝろ話しながら山をあるき、お別れの時が來てもハイディはなかなかお醫者様を離さなかつた。お醫者様の手を引つ張りながら、山羊の一等すきな草の生えてゐる所や、夏お花が一等たくさん咲く所や、おぢいさんに教はつたお花の名前なごを、いちいち教へてあげた。いよいよお別れする所まで來るこゝろ、ハイディはお別れのあいさつをしてからも、ぢつと見送つてゐた。いつお醫者様が振り返つて見ても、ハイディは同じ所に立つて、手を振つてゐた。さうだ、昔、わたしの娘が、ちやうごかうして見送つてくれたものだつた、——お醫者様には又しても思ひ出がつきまふ。

よく晴れた秋日和がつゞき、お醫者様は毎朝小屋まで訪ねて來ては、山へのぼつた。樅の木が亭

々々聳え、その枝には猛鳥が巢喰ふ高い峯々へ、おぢいさんはお醫者様を案内して、珍らしい植物や動物を見付けては、その習性や用途をすばらしく精しく説明するので、お醫者様は大層よろこんで、別れぎにはきつこ、

「いつもいつも貴重な珍らしい御教示にあづかりますなあ」

とお禮を云ふのだつた。

又、特別お天氣のよい日には、ハイディといつかの所に行つて、讚美歌や、ハイディ獨特の面白のお話を聞かせてもらつた。ペーテルは少し離れた所におさなしく坐り、もう決してせんのように腹を立てたりしなかつた。

九月も末のある朝、お醫者様はいつもより元氣のない顔で小屋を訪ねた。今日きりでフランクフ

ルトへ歸らねばならないが、せつかく馴染みになつたこの山にお別れするのが辛い云つた。おぢいさんもハイディも別れを惜しみ、殊にハイディには、こんなに毎日仲よしになつた先生を、急にお別れしなければならぬといふことが、さうしても呑み込めず、不意を打たれてばかんとしてお醫者様の顔を見つめてゐた。お醫者様はいさまで、告げて、ハイディに途中まで送つてくれ云つて、手をひいて一緒に下りて行つた。しばらく行くまゝ立ち止まり、ハイディの頭を撫でながら云つた。

「さあ、もうこゝでお別れしようね。フランクフルトまでも連れて行けるのださい、んだだけねえ」

フランクフルトの有様がハイディの眼の前にまざまざと浮んで來た。果てしなくつゞく家の列、石の街、おまけにロッテンマイアさんやティネットの顔まで見えて來たので、ハイディはもちもちしながら云つた。

「先生が又いらしつて下さいな」

「さうだ、その方がいゝね。ぢや今はお別れしよう。さうなら、ハイディちゃん」

ハイディはお醫者様と握手しながら顔を見上げ

るを、やさしく見下ろしてゐるお醫者様の眼には、涙がいつぱいたまつてゐた。切り裂くやうに身を離し、お醫者様は坂道を下りて行つた。

ハイディは身動きもせずに見送つてゐた。涙のいつぱいたまつたあのやさしい眼が、深く心の底までしみ透つた。急にわーつと泣き出す、遠ざかつて行くかげを追つて、一生懸命に駆け出した。切れ切れに

「せんせーい、せんせーい！」

と叫びながら。

お醫者様は振り返つて、子供の追ひ付くのを待つた。ハイディは顔ぢやを涙でぐしょぐしょにして泣きじやくりながら、

「今すぐ先生をいつしよにフランクフルトへ行きます。いつまでも先生をみますわ。おぢいさんにさう云つて來ますわ」

お醫者様は肩に手をかけて、やさしくなだめた。「よしよし、だき今ぢやなくね。今はもうしばらく樅の木の下にゐないで、又病氣になるからね。だき、もしもわたしが病氣になつて、ひきりぼつちになつた時、わたしのところに來てくれるかね？ わたしには、そんな時、世話をしてくれはつて

くれる人がゐてくれるのださ、あてにしてもいいかね？」

「えゝ、えゝ、お迎ひによこして下さつたら、すぐその日に、飛んで行きますわ。わたし、先生はおぢいさんとおんなじ位、大好きなんですよ」
それでもまだ、ハイディはしゃくり上げてゐた。

もう一度さよならをして、お醫者様は又下りて行つた。ハイディはちつと見送つて、お醫者様が、豆粒位に見えるまで、手を振つてゐた。お醫者様はその手を振つてゐるハイディの小さな姿を、日に輝く山々をもう一度見おさめながら、つぶやくのだつた。

「山はいゝ、からだにも心にも。仕合せを失つたものも、あそこではもう一度それを見出すことを教へられるのだからなあ」

十八、デルフリ冬の

雪が小屋のまはりに高く積つて、窓は地面とすれすれになつて、戸口はすっかり隠れてしまつた。ペーテルは毎朝、雪掻きをしなければならなかつた。霜で雪が凍てついてゐない時には、窓から跳び出すと、柔い雪の中に肩まですつぱり埋れてしまふので、手や足や頭で蹴もいて、やつと出て

來るのだつた。するとお母さんが大きな箆を渡ししてくれるので、それで戸口までの路を一生懸命に掃へる。よほご氣を付けて雪を掻き分けておかないと、戸を開けた途端にさつと柔い雪の塊が家の中まで轉り込んで來たり、雪が凍てついてゐる時には氷の塀が出來て戸口を閉ざし、誰も出ることも入ることも出來なくなるのだつた。こんな時こそペーテルには一等うれしい時で、窓からここにち固まつたすべつこい地面に飛び降りて、お母さんから小さな櫓をわたしてもらふと、それに乗つて、一面に雪が積つて絶好の橇道になつた山道を、すき勝手に迂りながら、デルフリへ下りて行くのだつた。

おぢいさんも、もし山の上で冬を越してゐたら、きつと毎日こんなことをしなければならないのだつたが、今年の村の人達との約束通り、初雪が降り出すと、小屋を閉ぢてハイディと山羊をつれて、デルフリの昔自分の借りて住んでゐた教會のそばの古い家に暮らしてゐた。この家はもこ、えらい軍人の建てた家であるが、その後住む人もないままに、荒れるにまかせ、安い家賃で人に貸してゐたので、おぢいさんは息子のトビアスがまだ小さ

い頃、こゝを借りて住んでゐたのである。おぢいさんがなくなつた後は又すつこ空き家で、今では雨が漏り風が吹き込んで、夜は蠟燭もつけておけない位で、冬などは凍え死にさうで、さても住めさうにもなかつたが、おぢいさんには修繕の心得があるので、秋のうちから借り入れてすつかり手入れをし、十月の中頃にハイディと一緒に移つて來たのである。

家のうしろは崩れた塀に圍まれた空地になつてゐて、その上にアーチ形の窓がそびえ、そこから禮拜堂の圓屋根にかけて、ぎつしりミ葛の葉がからんでゐた。その次ぎが大きな廣間で、戸も何もなく、空地へ行き抜けになつてゐた。壁も屋根もほんの申し譯ほき残つてゐるきりで、二本の太い柱で支へてあるのやつミ倒れずにすんでゐる有様である。おぢいさんはこゝに板仕切りをして、床に藁を敷き、山羊小舎にした。こゝから長い長い廊下がつゞき、途中割れ目や裂け目から空や野原やおもての通りが見えたりするが、つき當りに頑丈な樫の木の戸のついた少しも荒れない部屋がある。こゝだけは壁も腰板もそのまゝで、隅つこには天井までミゞきさうな大きなストーヴがあり、

その白い瓦には、青い色でいちめんに繪が描いてあつた。木立ちにかこまれた古いお城に獵犬をつれた獵人のゐる繪や、しづかな湖の大きな樫の木陰で人が釣りをしてゐる繪なきがあつた。ストーヴのまはりに坐つて繪が見られるやうに、腰掛けが据えてあり、ハイディもおぢいさんについてこの部屋に這入るなり、いちばんにこの繪が目について、腰掛けてながめた。ストーヴミ壁の間には四枚の板がよせかけてあつた。ハイディははじめ林檎でもかこつておくのかミ思つたが、よく見るミ、乾草を積み、シーツを敷き、麻袋をかけた、山の小屋でしてゐたのミ同じ自分のベットださわり、手を叩いてよろこんだ。

「まあ、おぢいさん、ここがわたしのお部屋なの？ すてきね！ だけき、おぢいさんはきこで寝るの？」

「お前はストーヴのそばでないミ凍えてしまふからな。わしの部屋も見に來てごらん」

ハイディはおぢいさんのあさから飛びまはりながらついて行くミ、その隣の少しせまい部屋がそれだつた。も一つ隣の部屋を開けた時、ハイディはびつくりして立ち止まつた。お臺所らしいのだ

けれど、こんなに廣いお臺所は、今迄一ぺんも見
たことがなかつたので、こゝは荒れ方もひどかつ
たので、おちいさんは手入れをするのに並大抵で
はなかつた。あんまり澤山壁の穴を塞ぐのに新し
い板を打ち付けたので、ちよつと見るに、部屋
のまはりにすらりとした小さな戸棚でも竝べたやうだつ
た。古い大きな戸はねぢや釘をさつさり使つて、
丈夫に打ちつけておいた。外には、こわれた塀や
板戸に雜草が丈高く生ひ茂り、甲蟲やミカゲが無
數に住んでゐたので、これは是非とも必要なこと
だつた。

ハイディはこの新しい住ひをひどく悦び、着い
たあくる朝には、もう家ぢうのきの隅までも勝手
を覚え、ペーテルを案内しては、すみすみまで説
明してやつた。

ハイディはストーヴのそばの自分の隅つこで、
ぐつぐつと眠つた。けれど、朝目が覺めた時は、
まだ山の上にあるつもりで、すぐに飛び出して、
樅の木があんなに音を立てないのは、雪が重たい
のではないかしらと、見に行かうとして、さてあ
たりを見まはして、山の上の小屋ではなかつたこ
ろを思ひ出し、へんな重苦しい悲しい氣持になる

のだつた。でも、おちいさんが外で山羊の世話を
してゐる聲や、山羊たちがハイディに早く来てく
れさせがむやうに啼く聲が聞えて来るに、やつぱ
りうちにゐたのだといふ氣がして、安心して、大
急ぎではね起きて、山羊のきこころへ駆けつけるの
だつた。

四日目の朝、ハイディはおちいさんの顔を見る
なり云つた。

「わたし、今日はおばあさんの所に行つてあげな
きやならないわ。あんまり長いこと行かないと、
可哀さうだわ」

けれどおちいさんは賛成しなかつた。

「今日もあしたもまだ駄目ぢや。山は大雪で、今
も降りつづいてゐる。あの元氣者のペーテルでさ
へ來られないのぢやから、お前のやうな小つちや
い子は、雪に埋つてもれてしまふぞ。埋つてもれたが最
後、探し出せなくなるから、凍てつくまでお待ち
したら、堅い雪の上を歩いて行けるからな」

待つのはつらかつたけれど、でも日の經つのも
わからない位、ハイディは忙がしかつた。デルフ
リの村の小學校へ、毎日、朝からおひるからと通つ
て熱心に勉強してゐたのである。ペーテルはしよ

つちう休むので、めつたに會はなかつた。先生はのんきな人で、時々、

「ペーテル君は今日もまた休んでゐるな。きつミ山の雪が深く出て來られないんだらうな」

さいふだけだつた。そのくせ、その雪の山道も、學校がすんだ頃になるさ、雜作なく通れるやうになるさ見え、ペーテルは夕方にはよくハイディのさころへ遊びに來るのだつた。

やつミのこゝで、四五日後のある日、お日様が顔をのぞかせ、眞白な地面の上をキラキラと照らしたが、この白い地面は夏のお花ほごにはお日様はすきでないさ見え、ぢきに又山のうしろへ引つ込んでしまつた。けれども晩には澄んだ大きなお月様が出て、夜さほし眞白な大雪原を照らし、あくる朝は山ぢうが一つの大きな水晶のやうにざらざらと閃めきわたつた。ペーテルはいつものやうに窓から飛び降りるさ、ふわりと雪の中に沈み込むさ思ひの外、堅い地面にこつんさつき當り、二三歩つるつるさ構のやうに足を這らせ、びつくりした。やつミ踏み止まり、足で地面を叩いて堅さを試し、踵で雪の表に穴をあけようさ力一杯踏ん張つて見たが、一さかけの氷をもかくこゝミが出来

なかつた。アルムの山ぢうが、鐵のやうに凍つたのである。これこそペーテルの待ちのぞんでゐたこゝで、道が固まればハイディが歩いて登つて來られるのである。ペーテルは大急ぎで家へ駆け込み、お母さんのこさへてくれたお乳を一さ飲みにして、パンを一さ切れポケットに押し込むさ、

「學校へ行つて來るよ」

さ云つた。おばあさんは

「それがよい、しつかり勉強しておいで」

さ力づけてくれた。

ペーテルは小さな構を引きずつて又窓から飛び降りて、見る間に山を這り下りた。稻妻のやうな早さでデリフリまで來たが、速さに押し流されてなかなか構が止まらず、無理に止めれば怪俄をするか構をいためるに決つてゐるので、そのまゝも少し先きまで行くさ、平らになつた所でやつミ構がひさりでに止まつた。マイエンフェルトのまだ少し先きまで來てしまつてゐるのである。ここから引き返すには随分時間がかかるから、さうせ學校は遅刻ださ肚をきめて、ゆつくりゆつくりのぼつて行くさ、デルフリに着いた時はハイディがもう學校から歸つておぢいさんさ御飯をたべてゐ

た。ペーテルは這入つて行き、今日は特別話があるので、部屋のまん中に突つ立つたまま、いきなり叫んだ。

「もう、ちゃんさあるんだぜ」

「ちゃんさある？ 一體何がぢやね。お前の話は、まるで戦争ぢやな、大將」

「霜がさ」

「あら、そしたらわたし、おばあさんここへ行けるわ」

ハイディにはペーテルの云ふことがぢきにわかつて、うれしさうに云つた。

「だけき、そんなら何故學校へ來なかつたの？」

霜が凍てついてゐたのなら、橋で這つて來れたぢやないの」

やつて來られるのに學校をすゐて休むなんて、以ての外ださハイディは詰るのだつた。

「橋が這りすぎて、遠くまで行つちやつたから、遅くなつたんだよ」

「脱走兵ぢやな。脱走兵はたしか、耳を引つ張られるのぢやつたな」

ペーテルは引つ張られは大變さ、あわてて帽子をずらせて耳をかくした。ペーテルにはアルムを

ぢさんが一等こわいのである。

「大將が脱走なんぞしては、餘計恥づかしいな。

もし山羊がいふことを聞かずに、てんでに好き勝手に行つてしまつたら、お前はさうするかね」

「ひつばたいてやるさ」

ペーテルは言下に答へた。

「それなら、子供がそんな行儀のわるい山羊の眞似をして引つばたかれたら、お前はさう思ふね？」

「いい氣味だい」

「そし、そんならよく覚えておくのぢやぞ、今度ももしお前が、すゐて學校の前を橋で素通りなんぞしたら、山羊さおんなじに、あゝでわしにうん

さ引つばたかれるのぢやぞ」

ペーテルは、今やつこ、さつきからおぢいさんの訊いてゐたことの意味がわかり、お行儀のわるい山羊みたいな子供さは、自分のことを云はれてゐたのださ氣が付くさ、自分がいつも山羊のお仕置きに使ふ鞭のやうなものが、どこかにありはしないかき、急に恐る恐る部屋の隅つこの方をうかがふのだつた。だがおぢいさんは面白さうに云つた。

「まあこつちへ來て何かお上がり。それがすんだ

ら、ハイディを連れて行くのぢや。夕方又送つて来ておくれ。夕飯をご馳走するからな」

話か思ひもかけないことになつて、ペーテルはここにこしながら、早速ハイディの横にかけた。

ハイディはこれからおばあさんに逢ひに行くのだと思ふさ、うれしくて胸が一ぱいになり、もう一口も食べられなくなつて、自分のお皿のぢやがいのだの焼きチーズだのを、そつくりペーテルに押しやつた。おぢいさんはおぢいさんで、お皿に一ぱい入れてくれたので、ペーテルの前には御馳走が山と積まれたが、ペーテルは更にひるむ氣色もなく、またたく間にすさまじい勢で平げて行つた。ハイディは戸棚からクララにもらつた溫い外套を出して著て、頭巾もかぶつてすつかり用意をして、ペーテルの食べ終へるのを待ち、

「さあ、行きませうよ」

さ促した。道々ハイディはペーテルに、山羊がはじめて新しいおうちに引越して來た時、とても悲しさうにして、なんにも食べようさもしないで、頭を垂れ、啼き聲さへ立てなかつたので、おぢいさんにわけを訊ねるさ、それはハイディがフラックフルトへ行つたのさおんなじなのだ、生まれて

初めて山を下りたのだからな、さ云つたことを話し、

「ほんたうに、自分で味はつて見なくちや、その氣持はさてもわからないものよ」

さしみみ身につまされて云つた。

ペーテルは何だかさても考へ込んでゐて、ハイディの話もろくろく聞いてゐなかつたが、家も間近になつた時、急に立ち止まつて、ぼつんさ云つた。

「アルムをちさんに引つぱたかれるよりやあ、學校へ行つた方がましだなあ」

ハイディもそのよい心掛けをはげましてやつた。家にはお母さんがひまりで編物をしてゐた。おばあさんは少し加減がわるくて、寒いので伏せつてゐるのだつた。ハイディが次ぎの部屋へ飛んで行くさ、おばあさんはうすい蒲團にくるまつて、その上からあの溫い肩掛けをかけてゐた。

「やれ有難や」

おばあさんはハイディを見るさ叫んだ。この秋ぢう、おばあさんはハイディの姿が少しでも見えないさ、又フラックフルトへ連れて行かれたのではないかさひやひやしてゐたのだつた。フラック

フルトから見知らぬ紳士がハイディを訪ねて來たミペーテルに聞いてからは、その人がひそりで歸つてしまつたあさまでも、今に又ハイディを迎へによこすのではないかミ、心配でたまらなかつたのである。ハイディは寢臺のそばへ行き、

「おばあさん、ひきくわるいの？」
こたづねた。

「いいえ、ちよつと寒さがこたへただけなんだよ」

おばあさんはハイディの頭を撫でながら云つた。

「そんなら、暖くなつたら、ぢきによくなるわ」
「さうさ。もつと早くだつて快くなるよ。紡ぎものをしなくちやならないからね。今日だつて少ししようと思つただけれぎ、なあに、あしたは起きられるよ」

おばあさんはハイディがひきく心配してゐるのを見て、安心させようミ、一生懸命に云つた。ハイディはこれですつかり安心し、今度はしげしげミおばあさんの様子をながめて、

「フランクフルトちや肩掛けは外へ出掛ける時にかけるのよ。おばあさんは、ねるミきに著るも

のだミ思つて？」

「さうぢやないんだくれぎもね、お蒲團がうすいから、これにかかるミ温いのでね」

「だけぎ、おばあさんの寢臺は、頭の方が低くなつててよ、あべこべだわ」

「それもわかつてるのだけれぎ」

おばあさんは少しでも頭を高くしようミして、板のやうにうすい枕の下に手をすけながら云つた。

「長く使つてゐるミ、枕がだんくへしやげてしまつたのだよ」

「まあ、それぢやクララに頼んでフランクフルトのわたしの寢臺を持つて來ればよかつたわね。三つも枕が積み重ねてあるのよ。わたし、高くつて寢られやしないから、頭をはづしてみたり、でもお行儀がわるいかミ思つて又のつけたりしてたのよ。おばあさんは、あんなの好き？」